

大学教育のグローバル化：農学教育の視点から

平松, 和昭
九州大学大学院農学研究院

<https://doi.org/10.15017/1912796>

出版情報：基幹教育紀要. 4, pp.3-4, 2018-03-23. 九州大学基幹教育院
バージョン：
権利関係：

大学教育のグローバル化 —農学教育の視点から—

平松 和昭

前農学研究院長, 九州大学大学院農学研究院, 〒812-8581 福岡市東区箱崎 6-10-1

Globalization of University Education

Kazuaki HIRAMATSU

Former Dean, Faculty of Agriculture, Kyushu University, 6-10-1 Hakozaki, Higashi-ku, Fukuoka 812-8581, Japan

*E-mail: hiramatsu@bpes.kyushu-u.ac.jp

農学の教育研究を担当する立場から、農学を切り口として大学教育のグローバル化について考えてみたいと思います。

皆さんは、農学という学問分野が担当する領域をご存知でしょうか。農学部がしばしばミニ・ユニバーシティと呼ばれるように、実は農学が担当する領域は非常に広く、また幅広い裾野を持っています。農学は、農林水産業への直接的貢献だけでなく、自然・人工生態系における生物生産と人間社会との関わりを基盤とする総合科学です。生命科学、生物資源科学、環境科学、生活科学、社会科学など、多様な学問が協同して、農林水産生態系の持続的保全と発展を図り、人類と多様な生物種を含む自然との共生を目指します。さらに、生物機能の開発・利用技術の開発、社会システムの整備を提案・実現していきます。そして、地球環境を保全し、食料や生物資材の生産を基盤とする包括的な科学技術を発展させ、人類の共存と福祉に貢献します。

古くから医食同源と言われるように、私たちの健康を常日頃から支えるには、健全な食生活が重要です。さらに積極的に健康を増進するために、現代では様々な機能性食品の利用も盛んになってきました。また、再生医療や免疫療法などの次世代医療を支える基礎学問として、農学は生命科学研究を展開しています。未来のエネルギー問題の解決にも、生物資源を活用した再生可能エネルギー利用が有望視されています。

このような農学を教授する農学教育ですので、地球規模で農林水産業・農学を考えることができる人材育成が不可欠となってきます。九州大学農学部・大学院生物資源環境科学府では、上記の農学の使命を達成するために、国際的に通用する専門性と技術を有するばかりでなく、豊かな課題探究能力とバランス感覚を備え、国際的リーダーシップを発揮できる多様な人材を育成することを教育目的とし、「農学に対する総合的な知識、国際的に通用する専門性を備えた教養人・高度職業専門人・教育研究者を養成する」という具体的目標を設定して教育活動を展開しています。この目標を達成するためには、先端科学としての農学の広範な基礎知識とコンセプトを吸収させる教育を維

持しながら、各専門教育コースの知識・技術を進化させることが必要ですが、そのためには、コミュニケーションツールとしての英語能力を向上させ、日本のみならず地球規模の農学における実問題をターゲットにして、問題解決の糸口、プロトコルを学ばせることが必要です。

一言で表現すると、専門性とコミュニケーション能力、課題探求能力・問題解決能力を兼ね備えた実問題解決型人材の育成です。九州大学農学部・大学院生物資源環境科学府では、特に国立大学法人化以降、以上の教育方針に基づき、文部科学省や日本学術振興会の支援を受けて、日本人学生や留学生対象の数多くの教育プロジェクトを実施し、その成果を主専攻に取り込んできました。これらの教育プロジェクトで人材育成の要としていたのが、先端科学分野を含めた次世代農学の広範な基礎知識と各々の専門分野の知識・技術の修得と、農学を取り巻く地域・地球規模の課題を俯瞰的に把握する汎用技術（多文化・異文化に対する知識と理解力、問題解決力、論理的・創造的思考力等）の修得です。

ところで、2015年9月、ニューヨーク国連本部において「国連持続可能な開発サミット」が開催され、193の加盟国によって「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ（2030アジェンダ）」が全会一致で採択されました。2030アジェンダでは、国際社会が2030年までに貧困を撲滅し、持続可能な社会を実現するための重要な行動計画として、17の目標（ゴール）が持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals : SDGs）として設定され、併せてより具体的な169のターゲットも示されています。SDGsは、2001年に策定されたミレニアム開発目標（Millennium Development Goals : MDGs）の後継とされており、MDGsで達成できなかった課題、さらに、この15年間に顕在化した都市、気候変動、格差などの課題の解決を目指すとしています。MDGsが主に発展途上国の開発目標を定めたものであったのに対して、SDGsは先進国も含めた全ての国の目標と位置付けられています。17のSDGsと169のターゲットは紙面の都合、紹介できませんが、その一つ一つを見ていくと、農学と関連深い項目が数多く並んでいることが判ります。

地球社会のグローバル化が急速に進行する中、農学を取り巻く諸問題は、SDGsが示すように、さらに複雑化、多様化しています。現在、地球規模で私たちの生活に影響する問題として、地球温暖化、エネルギー問題、生物多様性の維持、食糧の持続的供給、食の安心・安全、貿易自由化などがニュースでしばしば取り上げられていますが、これらは全て広い意味で農学が取り扱う問題です。

農学こそ、これまで以上にグローバルな展開が必須な学問で、それに呼応して農学教育こそ、高い専門性とコミュニケーション能力、課題探求能力・問題解決能力を兼ね備えた実問題解決型人材の育成が求められています。今後も社会の期待、付託に応えていくためには、先端科学としての農学の広範な基礎知識とコンセプトを吸収させ、コミュニケーションツールとしての英語能力を向上させる教育を維持しながら、実問題解決型人材育成の代表的教育手法の一つである Problem Based Learning (PBL) のノウハウの教員間での共有と波及、PBLを実施するための教育環境の整備、新たな教育手法の開発など、教育システムの持続的改革が求められます。

農学を例に「大学教育のグローバル化」について記述しましたが、その教育コンセプトは九州大学基幹教育や共創学部とまさに合致するもので、「農学」の部分置き換えれば、他学部・他学府の専攻教育の目標とも一致する部分も多いと感じます。忌憚のないご意見、ご批判頂ければ幸いです。